

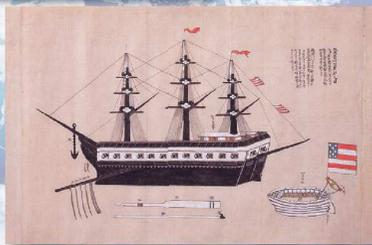
現代は、インターネットで知りたい情報を手軽に調べたり、海外に自由に行き来したりすることもできますが、江戸時代は、200年以上続いた鎖国のため国が閉ざされ、日本人が海外へ行くことはもちろん、許可された外国の船以外は日本に来ることも禁止されていました。

しかし、1853(嘉永6)年、アメリカのペリーが来航したのをきっかけに、日本は鎖国をやめて開国しました。幕府は、海外の文明を知るために、アメリカやヨーロッパなどに使節団を派遣し始めます。幕末から明治にかけて、多くの日本人が海を渡るようになり、その中には佐賀の人たちもたくさんいました。

もともと佐賀藩は、鎖国時代、唯一西洋に開かれた長崎港の警備を務めていたことから、西洋の技術や文化に強い関心を持っていました。蘭学らんがくの研究に積極的に取り組み、その中心的な存在だったのが佐賀藩主鍋島直正なべしまなおまさです。長崎警備を通して、海外の事情をよく知っていた直正は、外国を身近なものに感じ、西洋の技術や文化を取り入れながら優秀な人材を育てていきました。そのため、誰もが自由に海外に渡れない時代に、佐賀藩は他藩より多くの人々を派遣することができたのです。



■黒船来航図巻



(佐賀県立佐賀城本丸歴史館蔵)

## □アメリカ文化に触れた遣米使節団

開国した日本は、1858(安政5)年、アメリカと日本との貿易に関する取り決めとして「日米修好通商条約にちべいしゅうこうつうしょうじょうやく」に調印します。その批准書ひじゅんしょ(条約を国家元首が承認する最終の確認書)の交換のため、1860(万延元)年、幕府は遣米使節団を派遣しました。使節団員は77名で、そのうち佐賀藩からは川崎道民かわさきどうみん、小出千之助こいでせんのおすけ、島内栄之助しまうちえいのすけなど7名が参加しました。

当時の日本人にとって、アメリカへの航海は貴重な体験だったため、多くの使節団員が記録を残しています。小出千之助は、「世界の通用語が英語である」と報告し、佐賀藩は従来の蘭学研究から英学研究へと転換を図ります。英語を学ぶための塾ちえんかん(のちの致遠館)を設立し、千之助も佐賀藩の後輩たちの英語の指導にあたりました。

川崎道民は、訪問した先々で自分たちの行動がすぐに新聞記事となって報道されることに驚き、新聞の果たす役割の重要性を実感します。日本にも活字印刷の新聞が必要だと考え、1872(明治5)年に佐賀県初の日刊新聞「佐賀県新聞」を発行しました。

アメリカ滞在中の使節団は、各訪問地でセレモニーやパーティーが催されるなど大歓迎を受け、一般のアメリカ国民とも触れ合いました。日本人の服装や日本刀、鬻まげの姿に関心が高まるなか、一部の人々からは見た目の違いから差別的な言葉や振る舞いも受けました。しかし、幕末の佐賀の人たちは、どんな時も上品で丁寧な振る舞いで接し、新しい技術や文化を、佐賀のため、日本のために生かしていきました。



■致遠館跡(長崎県長崎市五島町)

(川副義敦氏提供)

## □外国の文化や技術を知るためパリ万博へ

19世紀から、欧米では、世界各国の代表的な製品や技術、主要な産物を集めて披露する万国博覧会が開かれていました。日本の初参加は、1867（慶応3）年、フランスで開催されたパリ万国博覧会です。実は、幕府よりも先に、薩摩藩が単独での参加を決めていて、幕府が各藩にも参加を呼び掛けたところ、佐賀藩だけがそれに応じました。他藩は、鎖国以来、海外に不慣れだったことが不参加の原因と考えられます。これに対し佐賀藩は、長崎を通して海外の情報や知識を得ていて、藩士たちの渡航経験もあったことから、参加することに迷いはありませんでした。

佐賀藩からパリ万博に派遣されたのは5人で、当時、軍事改革の指導的な役割を担っていた佐野常民、貿易担当で商人の野中元右衛門、通訳として小出千之助もいました。現地では、グラバーの手助けによりイギリスに密航し、留学中だった石丸虎五郎や馬渡八郎も合流しています。また、幕府から将軍の名代として参加した徳川昭武一行の中には、補佐として後に加わった唐津藩の尾崎和一郎（俊蔵）もいました。

パリ万博でのエピソードとして、あたかも独立した国のように出展した薩摩藩と、それに反発した幕府とが対立したことが知られています。結果的に、幕府は「大日本国大君政府」、薩摩藩は「薩摩大守政府」、佐賀藩は「肥前大守政府」とし、まるで日本には3つの独立した国があるような出展になりました。

ちなみに、佐賀藩からは磁器や和紙、茶などが出品され、会場の人たちに佐賀の特産品をアピールしました。西洋の人たちにとっ



■1867年、佐賀藩の代表としてパリ万博に出席する一団。  
（後列左より）藤山文一、深川長右衛門  
（前列左より）小出千之助、佐野常民、野中元右衛門

ては珍しい品物ばかりだったので、とても好評だったようですが、使い方が分からず、徳利をランプ台として使ったり、大きな昆布を壁に飾ったりしたそうです。

にぎわいをみせたパリ万博でしたが、野中元右衛門はその様子を見ることなく、急病に見舞われてパリに着いた日に亡くなってしまいます。実は日本を離れる前から体調が悪く、周囲からの反対もありましたが、「フランスは“仏の国”と書くので、そこで死ぬなら本望」と言っていたそうです。たとえ健康体であっても、当時の人々にとって、船での海外渡航は決して安全とは言えず、命がけでした。彼らが海外で得た知識・技術は、新しい時代を担う基盤となりました。

## □グローバルな視点で世界から日本を見るということ

時代は、江戸から明治へと変わり、1871（明治4）年、右大臣である岩倉具視を特命全権大使とする、岩倉使節団を米欧諸国に派遣することになりました。これは、近代的な国づくりを目指して、各国の優れた制度や文化、産業や教育などを学ぶことが目的でした。

岩倉を補佐する副使として参加したのが、木戸孝允、伊藤博文、大久保利通、そして武雄出身の山口尚芳でした。その他、佐賀県からは使節団員として久米邦武、留学生として鍋島直大とそれに随行した百武兼行、山口俊太郎（山口尚芳の長男）、相良猪吉（大隈重信の甥）など、総勢107名での船出となりました。行き先はアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの12カ国で、大隈重信や佐野常民らが中心となって準備を進めて参加した、ウィーン万博も見学しました。



■岩倉大使一行写真  
（武雄市図書館・歴史資料館 提供）  
（左より）木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

留学生の中には少年もいて、山口俊太郎も当時満8歳でしたが、「神童」と呼ばれるほど優秀で、そのままイギリスに留学しました。

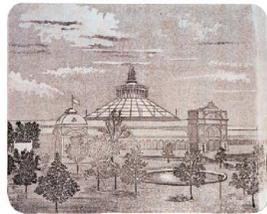
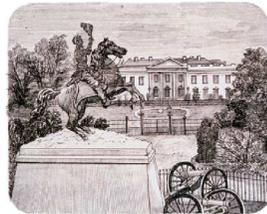
9年後に帰国しますが、イギリス人のように英語を話せたそうです。

久米邦武は、訪問した先々で記録したメモや、各国で買い求めた書物をもとに『米欧回覧実記』を書き上げました。300以上の挿絵が掲載されているため、とても分かりやすく、当時の日本人に大きな衝撃を与えました。

150年以上も前から、すでに世界を見ていた佐賀県の人たち。苦難を乗り越え、世界から日本を眺める視点を培った彼らは、その後、さまざまな分野で活躍していきました。



■久米邦武 (久米美術館 提供)



(久米美術館 蔵)



■『米欧回覧実記』

(川副義敦氏 蔵)

■『米欧回覧実記』で使用された挿絵

## □幕末から明治の初めにかけて、使節団に加わって世界を見聞した佐賀県の人たち

- 1860(万延元)年  
遣米使節団としてアメリカへ  
綾部新五郎、川崎道民、小出千之助、島内栄之助、福谷啓吉、本島喜八郎、秀島藤之助(以上、佐賀藩)
- 1862(文久2)年  
遣欧使節団としてヨーロッパへ  
川崎道民、石黒寛次、岡鹿之助(以上、佐賀藩)  
幕府の貿易調査のため上海へ  
納富介次郎、深川長右衛門、山崎卯兵衛、中牟田倉之助(以上、佐賀藩)
- 1865(慶応元)年  
グラバーの手助けでイギリスに密航留学  
石丸虎五郎、馬渡八郎(以上、佐賀藩)
- 1867(慶応3)年  
パリ万国博覧会に参加  
佐野常民、野中元右衛門、深川長右衛門、小出千之助、藤山文一(以上、佐賀藩)  
尾崎和一郎(唐津藩)
- 1871(明治4)年  
岩倉具視の遣米使節団としてアメリカ、ヨーロッパへ  
山口尚芳、中山信彬、久米邦武、中島永元、中野健明、山口俊太郎、相良猪吉(以上、旧佐賀藩)



(佐賀県教育委員会「佐賀県教育史」より)

■石丸虎五郎(右)と中牟田倉之助(左)



(佐賀県立佐賀城本丸歴史館 蔵)

■パリ万国博覧会の会場全体図



『明治天皇御記附図補本1「岩倉大使欧米派遣横浜港」(宮内庁 宮内公文書館 蔵)

■「岩倉大使欧米派遣横浜港」

この他にも、旧佐賀藩の鍋島直大や百武兼行、旧小城藩主の鍋島直虎、多久の袋久平など、ヨーロッパに留学した多くの佐賀県の人たちがいました。

**考えてみよう!**

海を渡った佐賀県の人たちのように、あなたがチャレンジしてみたいことはありますか?

より高い目標を設定し、それを達成するためには、何が必要なんだろう。

【参考 文献】

- 「佐賀藩」川副義敦 著
- 「特別展近代との遭遇～世界を見る・日本を創る」佐賀県立佐賀城本丸歴史館

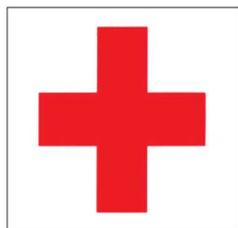
# 第3章

佐賀県の人物  
【No.2】

# 日本赤十字社の生みの親

皆さんは、白地に赤い色の十字マーク(「赤十字」)を知っていますか?病院や医療を表すマークだと思っている人も多いかもしれませんが。「赤十字」は、戦争や紛争で傷ついて苦しんでいる人々を守り、赤十字社の一員として公平な立場で活動していることを示すために、国際的に取り決められた重要なマークなのです。

その始まりは、赤十字の創設者であるアンリー・デュナンが、「傷ついた兵士はもはや兵士ではない、人間である。人間同士として尊い生命を救わなければならない」と訴えたことによります。デュナンの信念に強く心を動かされ、日本に博愛社(後の日本赤十字社)を設立したのが佐野常民でした。



■赤十字マーク  
このマークを掲げた病院や救護員には、攻撃をしてはいけないと国際法や国内法で定められています。

(日本赤十字社 提供)



■アンリー・デュナン  
(1828-1910)  
スイス人の実業家で第1回ノーベル平和賞を受賞。

(日本赤十字社 提供)

## □世界に目を向け、さまざまな分野で活躍したマルチ人間

赤十字の活動に半生を捧げた佐野常民とは一体どんな人物だったのでしょうか。一言で言うなら、政治・産業・科学など、さまざまな分野でリーダーシップを発揮したマルチな才能の持ち主でした。

出身は現在の佐賀市川副町で、1822(文政5)年に佐賀藩士下村家の五男として誕生。10歳の時、藩医(佐賀藩に仕える医者)を

務める佐野家の養子となり、医者になるため勉学に励みます。藩校弘道館で学び、大阪や江戸に出てからは緒方洪庵や伊東玄朴らに、西洋の学問や医学を学びました。

31歳の時、佐賀藩が理化学研究のために設けた精煉方の責任者となり、蒸気船やガラス、電信機など幅広い研究の指揮を執りました。常民の出身地である川副町早津江に、佐賀藩が三重津海軍所を設立した時は、監督として航海や造船の実地訓練を行い、日本初の実用蒸気船「凌風丸」を完成させました。



(日本赤十字社 提供)

■パリ万博に参加した1867年ごろの佐野常民。

1867(慶応3)年には、佐賀藩の代表としてフランスで開催されたパリ万国博覧会に参加しています。万国博覧会とは、新しい文化の創造や科学・産業技術の発展などを目的に、世界各国に技術や製品を紹介する催しです。常民は、このパリ万博で赤十字の存在を知り、敵味方に関係なく負傷した兵士を平等に救護するという理念に心を動かされます。また、1873(明治6)年に訪れたオーストリアのウィーン万博では、さらに進歩した赤十字の活動を目の当たりにし、赤十字のような人道的国際組織の発展こそ、文明進歩の証拠だと感じました。

## □決して諦めない。信念と情熱をもって博愛社を設立

明治政府が誕生して間もなくすると、旧武士階級である士族の不満が各地で暴発し、1877(明治10)年、九州で西南戦争が起こりました。西郷隆盛が率いる西郷軍と政府軍との戦いで、戦場となったの

佐賀県の概要  
第1章

佐賀県の歴史  
第2章

佐賀県の人物  
第3章

佐賀県の文化  
第4章

佐賀県の自然  
第5章

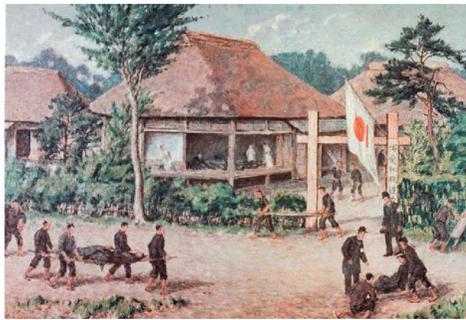
佐賀県の産業  
第6章

佐賀県の食文化  
第7章

は現在の熊本県・宮崎県・大分県・鹿児島県です。明治時代の初めに起こった士族反乱の中では、最大規模となる戦いでした。

明治政府で重要な役割を担っていた常民のもとに、激しい戦いで両軍とも多数の死傷者が出ていることが伝えられ、常民は今こそ赤十字が必要だと考えます。早速、同じ元老院議員だった大給恒とともに、博愛社設立嘆願書を政府に提出しますが、その願いは受け入れられませんでした。人として、傷ついた人間が目の前にいれば手を差し伸べるのが当然ですが、当時は、国家に反乱を起こした敵をわざわざ助けることに、納得できない人が多かったようです。

それでも常民は諦めず、最大の激戦地だった熊本まで行き、政府軍の総指揮官だった有栖川宮熾仁親王に嘆願書を直接提出します。常民の熱意によって即日許可をもらうことができ、これが日本の赤十字事業の幕開けとなりました。



■各地の軍団病院などで行われた博愛社の救護活動。  
(日本赤十字社 蔵)



■熊本洋学校教師館にて、博愛社設立が許可されました。  
(日本赤十字社 蔵)

## □未来に継承される常民の精神

常民が掲げた博愛精神とは、赤十字と同じく、敵味方の区別なく、全ての人を広く平等に愛するという事です。1886(明治19)年に日本がジュネーブ条約に加入したことで、翌1887(明治20)年、博愛社は日本赤十字社に改称。正式に国際組織としての仲間入りを果たすことになり、常民は日本赤十字社の初代社長に就任しました。

常民は、赤十字社の精神を広めるべく、精力的な活動を行いました。ただひたすらに「尊い命を救いたい」という思いだけで突き進んでいったのです。そんな熱い志は、災害や戦時の中、助けを必要とする人がいれば手を差し伸べて救護にあたる日本赤十字社の理念として、今もしっかりと受け継がれています。

常民は「進徳脩業」という言葉を好んだと言われています。この言葉は、よく学び、よい行いをして立派な人になることという意味ですが、その精神は、常民が生まれた地域の人々の間にもしっかりと根付いています。その一つが、佐野常民記念館の運営を手伝うボランティアスタッフの存在です。また、川副町にある博愛少年団もボランティア活動をしています。



■佐野常民が書いた「進徳脩業」。

(佐賀県立佐賀西高等学校 蔵)

考えてみよう!



公平かつ中立であるためには、どのようなことが大切だろうか、考えてみよう。



(参考 文献)

- 「佐野常民記念館図録」佐野常民記念館
- 「さがの人物探検99+you」佐賀市教育委員会
- 「日赤の創始者 佐野常民」吉川龍子 著

現在の日本では、18歳になると男女の区別なく選挙権が与えられ、誰でも平等に社会参加することができます。しかし、第2次世界大戦以前は、選挙権は男性にしか認められていませんでした。

女性が政治に参加できるようになったのは、1945（昭和20）年のことです。その頃から女性の政治家や首長も誕生し、性別に関係なく個人が平等に輝ける社会を目指し、さまざまな取り組みが行われるようになりました。

### □女性の社会参画の先駆者・奥村五百子

女性に参政権が与えられる100年も前に生まれ、積極的に社会運動に関わった佐賀県出身の女性がいました。奥村五百子です。

1845（弘化2）年5月3日、奥村五百子は唐津の高徳寺に生まれました。少女時代は5、6歳から三味線を習い、7歳からは読書や習字を習い始めました。当時、女性は学問に打ち込むより芸を覚えたほうが良いという世の中の風潮だったにもかかわらず、父で住職の了寛は、「これからは女性も学問が必要になる」という考えを持っていたのです。

五百子はとても元気な子どもで、正義感が強い性格でした。弱い者いじめをする男の子に対して立ち向かうなど、女性を侮辱する人たちに対しては、相手が目上の人であろうと堂々と反論しました。どんな時も公正で公平な考えを曲げない女性でした。



（高徳寺前住職・奥村豊氏 提供）

■奥村五百子  
1845（弘化2）年～  
1907（明治40）年

### □郷土唐津の開発事業に貢献

幕末頃、議論や武術を鍛える場所として、高徳寺の境内に浪士たちが集まりました。五百子は、彼らをもてなすうちにその中心人物となっていきました。18歳の時、了寛の命により、密使として男性の姿をして親戚にあたる長州藩家老宍戸家の元に行き、

無事に目的を果たすなど、数々の武勇伝があります。

1887（明治20）年、43歳の時、五百子は夫と離別して唐津に戻りました。商売をしながら3人の子どもの育てていましたが、その一方で、世話好きな性格だったため、近所のもめ事から地方政治の問題まで、あらゆる場面で頼りにされました。唐津港を国際貿易港として開港するため※1、東京の大隈重信邸に一人で陳情に訪れたのもこの年です。

五百子は自分の利益も顧みず、故郷唐津の事業を実現させるために多くの運動を行いました。主なものに、松浦橋の架橋事業、鉄道（唐津線）の開設、海軍貯炭場の払い下げ運動※2などがあります。

女性が表立って政治や事業に関わることが認められていなかった時代に、五百子は、大隈重信をはじめ佐賀県知事など数々の有力者のもとへ行き、働きかけたのです。政治にも強い関心を持ち、選挙運動の指揮をとったこともありました。

※1 1889（明治22）年、唐津港は国の特別輸出港に指定されました。

※2 払い下げ＝不動産などを売却すること



（山辺清氏 寄贈、高徳寺前住職・奥村豊氏 提供）



■大隈重信邸での陳情団  
（奥村五百子は前列右端）

### □朝鮮国訪問と婦人運動の高まり

奥村五百子の生家・高徳寺は、歴史的に朝鮮国とも深い関わりを持つ寺でした。兄で住職の円心は、仏教を広めるために朝鮮半島に渡り、釜山や仁川、元山に東本願寺の別院を建立。布教活動をより強化するために、五百子もたびたび光州を訪問しました。

1900（明治33）年、義和団事件が起こり、鎮圧のために戦った日本軍も多くの兵士が亡くなり、清に慰問団が派遣されました。五百子も慰問に行き、戦争で苦しむ兵士たちを目の当たりにしました。



■唐津市東城内二の門にある奥村五百子の銅像

当時の五百子はすでに50歳半ばでしたが、傷ついた人々を助けずにはられませんでした。「国のために女性たちも立ち上がらなければ」と、1901(明治34)年に、戦死者遺族の救護のため、「愛国婦人会」を設立しました。この団体は全国組織で、最盛期には会員数が世界有数の団体でした。

演説が得意だった五百子は、全国を遊説して回り、数年で多くの会員を集めました。「着物の半襟一つ買うお金を節約して、寄附してください」と訴えるその熱意が、人の心を動かしたのです。

1907(明治40)年、五百子は63歳でその生涯を終えました。その後の日本では、女性たちによるさまざまな運動団体が創設されました。人のため、社会のために尽くす五百子の生き方は女性の社会参加に大きな影響を与えました。



■高德寺の一室に保管された奥村五百子に関する資料

(高德寺前住職・奥村豊氏 提供)



■高德寺本堂の脇にある奥村五百子の墓

(高德寺前住職・奥村豊氏 提供)

### □社会で活躍した女性たち

小佐々祖伝尼もいたわりの心から多くの人々を助け、社会に貢献した女性の一人です。1872(明治5)年、現在の長崎県小佐々町に生まれ、嬉野市の光桂寺に嫁いだ祖伝尼(当時ツデ)は、夫を亡くした後、同寺の住職となりました。婦人会を結成し、女性たちに裁縫や書道を教えるなど地域のリーダーとしても活躍しました。

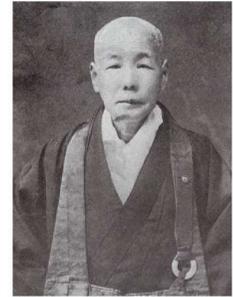
ある日、貧しい男性が寺にやって来た時、「食べ物を与えるだけではこの人のためにならない」と畑の仕事をさせながら寺に住ませました。

1928(昭和3)年、祖伝尼が施設をつくると、体の不自由なお年寄りや身寄りのない子どもたちが集まりました。その後施設は、戦後の厳しい時代も乗り越え、社会福祉の施設として発展しました。祖伝尼の慈悲の気持ちは今も受け継がれています。

また、学者として化学の発展に貢献した女性もいます。黒田チカは、1884(明治17)年、現在の佐賀市に生まれました。勉強好きだったことから佐賀師範学校を経て、東京の女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)に進学しました。

1913(大正2)年、日本で初めての女子大生の一人として東北帝国大学(現在の東北大学)に入学。女性が高い教育を受けることへの厳しい批判もある中、努力の末に大学を卒業し、国内の女性で初めての理学士となりました。その後、化学分野で女性第1号の理学博士となり、女性化学者の草分けとして、多くの功績を残しました。

さまざまな分野で自分の信じる道を切り拓いた佐賀県の女性たち。その歴史は、私たちがより良い社会を作り上げるために大切なことを教えてください。



(社会福祉法人 済陽園 提供)

■小佐々祖伝尼  
1872(明治5)年～  
1948(昭和23)年



(国立研究開発法人 理化学研究所 提供)

■黒田チカ  
1884(明治17)年～  
1968(昭和43)年

**考えてみよう!**

女性の立場が低かった時代に、信念を持ち社会を変える運動や研究など、さまざまな分野で活躍した女性たちはどんな思いがあったのでしょうか?

(参考文献)

- 「奥村五百子～明治の女と「お国のため」～」 守田佳子 著
- 「郷土の先覚者～明日を拓いた佐賀の人～」 佐賀県教育委員会

明治という新しい時代に、佐賀から沖縄に向かった第11代齋藤用之助。沖縄の近代化に寄与し、硫黄島島の島民の命を救った「神様」として、1933(昭和8)年に74歳で亡くなった後も沖縄の人々に慕われ続けています。

### □沖縄の人々と心開いて対話

第11代齋藤用之助は1859(安政6)年、現在の佐賀市諸富町で生まれました。齋藤家は藩祖鍋島直茂の時代から佐賀藩に仕え、代々「用之助」を名乗っています。初代齋藤用之助、権右衛門(初代用之助の次男)、齋藤佐渡(初代用之助の父)は、佐賀の武士道書といわれる『葉隠』にも、その名が登場します。

幼少期には藩校弘道館で学び、19歳の時に警察官になりました。1889(明治12)年、鹿島藩主鍋島直彬が初代沖縄県令(県知事)として赴任します。同じ年、用之助も巡査として沖縄に向かいました。

沖縄県はもともと琉球王国という王制の国でした。日本政府が琉球王国を廃止し、沖縄県を設置したので、沖縄の人たちは「自



■第11代齋藤用之助 (第14代齋藤用之助 提供)



■硫黄島島

出典：海上保安庁ホームページ (<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/GUUTSUKOKUSAI/kaiikiDB/kaiyo35-2.html>)



分たちを抑えつけにきた」と用之助たちを心よく思っていないでした。

そこで、用之助は時間をかけて、地元の人たちと対話を続けていきます。のちに用之助は、「ヒージャー郡長」と呼ばれるようになります。ヒージャーとはヤギのことで、沖縄料理の「ヒージャー汁」を好んで食べる用之助に、沖縄の人たちも少しずつ心を開き、受け入れてくれるようになりました。37歳で首里区長兼中頭郡長、39歳で那覇区長兼島尻郡長に就任しました。

### □島民の命を守るため移住を決断

1903(明治36)年4月、島尻郡内にある硫黄島島が大噴火し、島民に命の危険が迫ります。そこで用之助は、硫黄島島から約270km離れた久米島に、全島民を避難移住させようと決断します。当時、硫黄島島は中国貿易に欠かせない硫黄の産地だったため、「仕事なくなる」と心配する人や、「住み慣れた土地を離れたくない」という人がたくさんいました。用之助には、「多数決で決めるのはだめ。島民全員が納得しないといけない」という強い信念があったので、住民会議が行われるたびに硫黄島島に船で通い、一人一人の不安や希望を聞き取りながら説得していきました。

その一方で、用之助は、日露戦争勃発直前に政府と交渉して移住資金を集め、久米島に硫黄島島と全く同じ区割りの「字島島」地区を準備しました。場所は違っても、隣近所の顔ぶれなど、島と同じように暮らすことが安心につながると考えたからです。

やがて、島民全員が賛成し、大噴火から約8カ月後、3カ月の間に全島民の約700人が久米島に移住しました。

結果的に一人の犠牲者も出さず、全島民の避難移住を成功させた用之助は、今でも慕われています。



(第14代齋藤用之助 提供)

■硫黄島島と久米島字島島にある移住記念碑(移住100周年記念復刻碑)。毎年2月11日には島島移住記念式典が行われています。

## □沖縄近代化の基礎を築いた用之助

用之助は、硫黄島からの避難移住のみならず、沖縄県営鉄道（ケービン鉄道\*）や那覇港などの交通網も整備しました。また、若者に沖縄県外で農業や水産などの専門技術を学ばせて郡の役所で採用したり、学校を整備したりして人材教育を進めました。さらに、サトウキビの製糖工場を沖縄で初めて造り、砂糖組合を創設。サトウキビの積み出しや漁業振興のために造った港は「用之助港」と名付けられました。 \*沖縄では、<sup>ケービン</sup>軽便鉄道のことを通称「ケービン鉄道」と呼んでいます。

1925（大正14）年、用之助は66歳の時佐賀に帰ります。その10年前の1915（大正4）年の島尻郡長退任の際は、約1万人もの沖縄の人が見送り、当時の地元新聞では、その様子を「空前絶後」と表現したほどでした。

沖縄の人たちの気持ちを汲み取り、寄り添う姿勢を貫いて厚い信頼を得て、沖縄の近代化の基礎を築いた用之助。沖縄に尽くした根底には、「葉隠四誓願」の一つ「大慈悲を起し人の為になるべき事」の教えがありました。

## □用之助が結ぶ佐賀県とのつながり

用之助が結んだ佐賀県と沖縄県の間には、今も続いています。2012（平成24）年から佐賀市と久米島の中学生の交流が始まりました。また、2016（平成28）年には、伊万里市と久米島町、佐賀大学の三者が久米島にある海洋温度差発電の実用実証設備及び海洋深層水関連で連携協定を結びました。それをきっかけに小学生や市民、企業の間にも相互交流が進んでいます。



■久米島 ハテの浜で皆で一緒に未来に向かってジャンプ (第11代齋藤用之助顕彰会事務局 提供)